

教師による児童の行動評定と バウムテストの特徴との関連

—学校適応のあるべき姿を求めて—

田 邊 敏 明

The relationship between the behavioral assessments of children by teachers and the features of the Baumtest (tree-test); Seeking an appropriate judgement of the adjustment of children in school.

TANABE Toshiaki

(Received September 28, 2007)

キーワード：児童、教師による行動評定、バウムテスト、学校適応、社会化

問題と目的

学校教育における生徒指導とは、個性の伸張をめざすとともに、社会に適応できる資質を向上させる目的がある。つまり生徒指導は、個性の伸張と社会への適応という一見相矛盾するものを統合させる活動である。教師にとって、子どもの個性を大切にするのはもちろん大切だが、それと同時に学級集団をいかに運営するかという大きな課題に直面する。カウンセラーが主として個を扱うのに対して、教師はまず集団を扱わねばならない。

後者の社会に適応する資質については、教師が子どもに対して特に求める側面でもある。その子どもの社会化について、教師が子どもを観察する基準については、すでに作成されている。たとえば平成10年度の小学校での通知票に示される行動評定によれば、「基本的生活習慣」、「明朗・快活」、「自主・根気」、「責任感」、「創意工夫」、「思いやり」、「協調性」、「自然愛護」、「勤労奉仕」、「公正・公平」、「公共心」などがあげられている。しかし、それらはあくまで学校という土壌で教師が子どもに求める基準である。

一方で個性の伸張、いいかえれば心の成長をはかる指標としては、従来までバウムテストがよく用いられてきた（林・一谷，1973；津田，1992）。バウムテストで測定する子どもの特徴とは、木の成長にたとえられているように、本来は周囲からじゃまされることなく自由に伸びる点にある。

子どもの心の発達をさぐる上でのバウムテストに関する研究としては、従来まで発達的な指標との関連や、不適応行動との関連がさぐられてきた。一方で、バウムテストの特徴と学校での教師による児童・生徒の行動評定が比較されることは少なかった。

教師による子どもの行動についての評定と、バウムに見る子どもの心の成長とは、子どもの発達における異なる2つの見方であるものの、その差を見ていくことには意義がある。荒木（1998）によれば、バウムテストの結果はさまざまな資料とすべての面で一致するとは限らな

いという。しかも逆にその不一致部分こそが、子どもの理解を深めるものでありバウムテストならではの役割を果たすという。従って教師の行動評定とバウムテストの結果の食い違いを把握しておくことは、一つの見方こそ正しいとする偏った考えを避けるためにも必要であるし、両者の統合という意味での学校教育における真の適応観を考える意味でも興味深い。その不一致面、特に一方の見方ではポジティブとされているものが、もう一方でネガティブなものとの間に相関が見られた場合、その意味をさぐることは教師自身が自らの教育観を振り返る絶好の機会となろうし、またバウムテストの意味するところを再考する手がかりとなる。

つまり教師の側から見て発達上好ましい行動特徴を示すとされる子どもが、バウムテストでも好ましい特性を表すかどうかはわからず、逆に注意すべき兆候を示す場合もあろう。教師には先述の行動評定からも見られるように、学校文化独特の発達観や適応観というものがある。社会に適応する上で子どもが体験する周囲との衝突は、本来のびのびするはずの自我の成長を妨げるように作用する。一見うまく適応していると思われる子どもでも、バウムの特徴を見ると裏で強い葛藤を感じていることも考え得る。

ただ教師の理想とする子ども像とは、そのような外的な妨害にもうまく対処できる社会性のことであって、周囲との軋轢のなかでこそ自分らしさを発揮する面である。そのようなしなやかな主張という意味のアサーショントレーニングは、自分の主張したいことを、相手を攻撃することなく、相手にうまく受け入れられるような形で表出することにある。それこそ最終的には教師がめざす像と思われる。

そこで本研究では、特に個人の心の成長とともに、それをなんらかの形で阻害する形になりやすい社会性も重視する学校教育の観点から、社会性を教師の行動評定から見ることにし、個々の行動評定において教師からポジティブな行動評定をされた子が、バウム上での特徴としてはネガティブなものを現れたり、逆に教師にはネガティブな行動評定をされた子が、バウム上ではポジティブな特徴として現れるような相容れない面に着目しながら、教師の行動評定とバウムテスト結果の食い違いについて考察し、両者を統合するような適応観を見いだしたい。なお、本研究はまずバウムテストの特徴をポジティブあるいはネガティブのどちらかに決めてある杉浦（1991）の解釈を基調とし、必要に応じて Koch（1970）などの資料を参考にして考察したい。

研究1

小学校児童にバウムテストを実施し、一方で担任教師には児童の行動評定を依頼し、両者の関係を比較検討することを目的とする。

方法

①バウムテストの実施

参加者 山口県内の公立小学校4年1クラス24名（男子11名、女子13名）
5年1クラス30名（男子15名、女子15名）

テスト実施者 各クラスの担任教師

実施方法 集団で一斉実施

所要時間 10分から15分

バウムテストの材料 A4のケント紙1枚 4Bの鉛筆

バウムテストの教示

事前教示 バウムテストの教示にはいる前に、「これはテストではありません。日頃みなさんが、どのような思いで生活しているかを知るためのものです。」と前置きした。A4の紙の上部に氏名と年齢、生年月日を書かせ、それを裏返して木を描かせるようにした。

教示と実施 「実のなる木を一本書いて下さい。どのような実のなる木でもかまいません。イラストや漫画のような描き方はしないで、できるだけ一生懸命描いて下さい。」と伝えた。時間の目安として、10分から15分位を与えた。実際は個人差が大きく、5分で終わる子もいれば30分近くかかる子もいた。早く描き終わった児童はもう一度用紙を裏返しにして、余白に「描いた木の名前」を書いておくようにさせた。

②教師による行動評定項目

通知票の「生活のようす」11項目を教師による行動評定項目として採用した (Table 1)。

Table 1 通知表における行動評定項目 (生活のようす, 1998)

項目	生活のようす	
	4年生用	5年生用
基本的な生活習慣	健康や安全に努め、物や時間を有効に使い、礼儀正しく節度のある生活をする。	自他の健康と安全に努め、礼儀正しく、節度を守り節制に心掛けて生活をする。
明朗・快活	正直に、明るく元気に生活する。	前向きに明るい心で楽しく生活する。
自主性・根気強さ	よく考えて行動し、正しいと思うことは最後までねばり強くやり通す。	自分に合った目標を立て、計画的に根気強く努力する。
責任感	自分の言動に責任をもち、役割を誠意をもって行う。	自分の役割と責任を自覚し、信頼される行動をする。
創意工夫	自分でやろうと決めたことを工夫して取り組む。	進んで新しい考えや方法を求め、工夫して生活をよりよくしようとする。
思いやり	相手のことをおもいやり、親切にする。	だれに対しても思いやりと感謝の心をもち、相手の立場に立って親切にする。
協力性	相手の気持ちや立場を理解し、だれとでも仲よく助け合う。	自分と異なる意見や立場を尊重し、力を合わせて集団生活の向上に努力する。
自然愛護	自然に親しみ、動植物を大切にす。	自然を愛護し、生命あるものを大切にす。
勤労・奉仕	働くことの大切さを知り、進んで働く。	働くことの意義を理解し、進んで仕事や奉仕活動をする。
公正・公平	相手の立場に立って、公正・公平に行動する。	だれに対してもわけへだてすることなく、公正・公平に行動する。
公共心	公共物を大切にす、約束や社会の決まりを守って、人に迷惑をかけないで生活をする。	きまりの意義を理解して守るとともに愛校心をもち、人々の役に立つことを進んで行う。

結果

1. バウムテストの評定における数量化Ⅲ類の適用

①バウムの評定による各特徴の出現率 バウムの各特徴評定については、教師が各児童のバウムテストについて杉浦 (1991) の所見を参考に、特徴の出現をチェックし、さらに筆者がそれを再びチェックして修正した。その出現率を Table 2に示した。

Table2 バウムテストの結果における各特徴(所見)の出現率

小学4年生 男子11名 女子13名 計24名
 小学5年生 男子15名 女子15名 計30名

部位	分析項目	所見	4年			5年			全体	
			男子	女子	合計	男子	女子	合計		
全体的所見	1. 位置	左寄り	2(18.2)	5(38.5)	7(29.2)	8(53.3)	11(73.3)	19(63.3)	26(48.2)	
		左上	0(0.0)	2(15.4)	2(8.3)	1(6.7)	0(0.0)	1(3.3)	3(5.6)	
		左下	2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	2(13.3)	0(0.0)	2(6.6)	3(5.6)	
		中央下	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(13.3)	0(0.0)	2(6.6)	2(3.7)	
	2. 強調	冠強調	1(9.1)	1(7.7)	2(8.3)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	4(7.4)	
		幹強調	3(27.3)	5(38.5)	5(33.3)	1(6.7)	2(13.3)	3(10.0)	11(20.4)	
		右強調	1(9.1)	1(7.7)	2(8.3)	5(33.3)	2(13.3)	7(23.3)	9(16.7)	
		左強調	0(0.0)	2(15.4)	2(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(3.7)	
	3. 傾向・傾斜	左傾向	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	1(1.9)	
		右傾斜	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	1(6.7)	0(0.0)	1(3.3)	2(3.7)	
		左傾斜	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	2(3.7)	
	4. はみ出し	上はみ出し	3(27.3)	1(7.7)	4(16.7)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	6(11.1)	
		右はみ出し	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	3(20.0)	2(13.3)	5(16.7)	6(11.1)	
		左はみ出し	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	1(6.7)	3(20.0)	4(13.3)	5(9.3)	
	幹	1. 太さ	太い(3本)	6(54.5)	7(53.8)	13(54.2)	4(26.7)	1(6.7)	5(16.7)	18(33.3)
			細い(1本)	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	2(13.3)	2(13.3)	4(13.3)	3(5.6)
2. 輪郭		強い線	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	2(13.3)	0(0.0)	2(6.7)	2(3.7)	
		散漫線	3(27.3)	1(7.7)	4(16.7)	3(20.0)	3(20.0)	6(20.0)	10(18.5)	
		不連続	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(13.3)	1(6.7)	3(10.0)	3(5.6)	
		右不規則	2(18.2)	1(7.7)	3(12.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(5.6)	
		左不規則	2(18.2)	2(15.4)	4(16.7)	1(6.7)	0(0.0)	1(3.3)	5(9.3)	
3. 表面(樹皮)		傷(節)	1(9.1)	1(7.7)	2(8.3)	2(13.3)	2(13.3)	4(13.3)	6(11.1)	
		線	6(54.5)	7(53.8)	13(54.2)	10(66.7)	7(46.7)	17(56.7)	30(55.6)	
		洞(うろ)	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	5(33.3)	2(13.3)	7(23.3)	8(14.8)	
4. 基部(根本)		右陰影	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	1(1.9)	
		紙下縁立	5(45.5)	4(30.8)	9(37.5)	8(53.3)	3(20.0)	11(36.7)	20(37.0)	
		ふくらみ	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	2(13.3)	3(20.0)	5(16.7)	6(11.1)	
		左ふくらみ	0(0.0)	4(30.8)	4(16.7)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	6(11.1)	
5. ふくらみ・平行		広い基部	6(54.5)	3(23.1)	9(37.5)	6(40.0)	8(53.3)	14(46.7)	23(42.6)	
		ふくらみ・くびれ	1(9.1)	4(30.8)	5(20.8)	1(6.7)	8(53.3)	9(30.0)	13(24.1)	
6. 上端	平行	0(0.0)	5(38.5)	5(20.8)	3(20.0)	1(6.7)	4(13.3)	9(16.7)		
	開放	2(18.2)	3(23.1)	5(20.8)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	7(13.0)		
	直角(切断)	2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(3.7)		
	二股	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	6(40.0)	2(13.3)	8(26.7)	9(16.7)		
	特異な幹	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	2(3.7)		
枝	1. 伸び方	上向	1(9.1)	1(7.7)	2(8.3)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	3(5.6)	
		下向	2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	6(40.0)	3(20.0)	9(30.0)	11(20.4)	
		交差	1(9.1)	3(23.1)	4(16.7)	4(26.7)	2(13.3)	6(20.0)	10(18.5)	
		さまよい	3(27.3)	0(0.0)	3(12.5)	3(20.0)	3(20.0)	6(20.0)	9(16.7)	
	2. 先端処理	放射状	0(0.0)	2(15.4)	2(8.3)	4(26.7)	5(33.3)	9(30.0)	11(20.4)	
		開放	2(18.2)	2(15.4)	4(16.7)	4(26.7)	2(13.3)	6(20.0)	10(18.5)	
		直角(切断)	2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	2(13.3)	3(20.0)	5(16.7)	7(13.0)	
		尖鋭	4(34.4)	6(46.2)	10(41.7)	9(60.0)	2(13.3)	11(36.7)	21(38.9)	
		棍棒状	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(6.7)	1(6.7)	2(3.7)	
	3. その他	冠下枝	6(54.5)	4(30.8)	10(41.7)	7(46.7)	2(13.3)	9(30.0)	19(35.2)	
		一線枝	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	2(3.7)	
		前に突き出た	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	3(20.0)	3(10.0)	4(7.4)	
		接ぎ木	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	3(20.0)	2(13.3)	5(16.7)	6(11.1)	
		ふくらみ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(20.0)	1(6.7)	4(13.3)	4(7.4)	
		先が太くなる	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	3(5.6)	
		切り取られた	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	1(1.9)	
樹冠	1. 型	雲球型	5(45.5)	9(69.2)	14(58.3)	5(33.3)	2(13.3)	7(23.3)	21(38.9)	
		枝先雲球型	2(18.2)	1(7.7)	3(12.5)	2(13.3)	1(6.7)	3(10.0)	6(11.1)	
		アーケード型	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.9)	
	2. その他	押しつぶされ	1(9.1)	2(15.4)	3(12.5)	3(20.0)	2(13.3)	5(16.7)	8(14.8)	
	垂れ下り	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.9)		
実・花・葉	1. 実・葉	多い	5(45.5)	5(38.5)	10(41.7)	9(60.0)	8(53.3)	17(56.7)	27(50.0)	
	2. 落実・落葉	同じパターン	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	1(1.9)	
		落実	1(9.1)	2(15.4)	3(12.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(5.6)	
	3. その他	多種多様な実	2(18.2)	2(15.4)	4(16.6)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	6(11.1)	
		葉で覆い隠す	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	3(20.0)	4(13.3)	4(7.4)	
空想上の実		2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	4(7.4)		
根	1. 先端処理	花	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.9)	
		開放	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	3(20.0)	4(13.3)	4(7.4)	
	2. その他	閉鎖	3(27.3)	1(7.7)	4(16.7)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	6(11.1)	
		根強調	2(18.2)	0(0.0)	2(8.3)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	4(7.4)	
地平	1. 位置・形	後方	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(3.3)	1(1.9)	
		横延長	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(6.7)	2(6.7)	2(3.7)	
		傾斜	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(13.3)	2(6.7)	2(3.7)	
	2. その他	陰影	1(9.1)	0(0.0)	1(4.2)	0(0.0)	3(20.0)	3(10.0)	4(7.4)	
	草むら	0(0.0)	1(7.7)	1(4.2)	1(6.7)	3(20.0)	4(13.3)	5(9.3)		
その他	筆圧弱	1(9.1)	6(46.2)	7(29.2)	0(0.0)	3(20.0)	3(10.0)	10(18.5)		

②バウムテストの評定における数量化Ⅲ類の適用

その結果を、チェック有りを1、チェック無しを0にしてデータを作成した。バウムテストの特徴(所見)を変数とし、2クラスの児童をサンプルとした数量化Ⅲ類を実施した。なお統計ソフトにはこの分析のみエクセル統計を用い、他はSPSSを用いた。81の特徴を投入したが、出現のない特徴を除き、実際に結果が算出されたのは64特徴であった。その結果が、Table 3である。

Table 3 バウムテストにおける数量化Ⅲ類による分析結果

部位	分析項目	所見	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸	第5軸	第6軸	第7軸	第8軸	第9軸	第10軸
I 全体的所見	位置	左寄り	-0.490	-0.119	-0.299	0.530	0.525	-0.558	-0.759	0.350	-0.611	-0.221
		左上	0.804	2.882	0.859	1.605	-2.348	1.293	-0.869	-3.048	0.630	-2.621
		左下	0.349	-1.911	0.698	-0.855	-2.516	-0.627	0.363	-1.626	0.255	-0.690
	強調	冠強調	0.775	-0.438	-0.453	-1.235	1.098	1.048	-1.804	-1.799	-0.871	2.587
		幹強調	0.207	-0.004	-0.017	-0.928	-0.822	-1.133	1.342	-0.056	0.375	-0.075
		右強調	-2.117	-0.237	0.336	0.264	-0.047	1.527	0.789	0.106	-0.381	0.754
		左強調	0.062	1.200	-0.048	0.196	-2.002	0.315	-0.161	-2.054	0.239	-4.363
		左傾向	1.368	-0.136	-0.742	-4.533	8.036	3.877	-0.769	-4.826	6.355	-2.797
		右傾斜	0.230	1.394	-0.768	0.043	-0.210	-1.257	3.739	0.877	-0.431	-0.134
	はみ出し	左傾斜	1.141	-1.023	0.678	1.824	0.179	1.422	-1.768	-3.027	-0.075	1.262
		上はみ出し	0.096	0.620	-0.865	-0.693	-0.394	0.263	0.666	1.935	-0.055	-1.744
		右はみ出し	0.510	-0.175	-0.162	-0.102	-0.134	0.558	-0.374	0.926	-0.877	-0.048
II 幹	太さ	左はみ出し	0.527	-0.004	-1.212	-1.243	0.197	0.841	0.559	1.479	-1.087	-1.663
		太い	0.258	1.421	0.037	0.083	0.269	-0.390	0.330	0.585	0.419	1.162
		細い	-3.800	0.239	0.965	0.159	1.680	-0.719	0.476	-1.819	-3.200	-0.892
	輪郭	強い線	0.642	3.373	-0.056	1.256	-1.247	0.747	0.674	-0.810	0.386	1.028
		散漫線	0.214	-0.070	-0.551	-0.549	-0.715	-0.156	0.457	0.856	-0.070	-1.424
		不連続	0.989	-0.523	0.002	-2.511	3.444	2.192	-0.397	-2.281	2.534	-0.474
		右不規則	-2.112	-0.417	-0.167	0.881	-0.292	-0.689	-0.422	1.935	5.506	-0.555
		左不規則	-1.597	-0.605	1.009	-0.046	-1.057	-1.990	-0.486	-1.920	1.924	-2.439
	表面	傷	-0.441	-0.315	-0.210	1.379	0.547	-0.597	-2.488	0.967	1.667	-0.339
		線	0.282	-0.137	-0.162	-0.227	0.039	-0.195	-0.286	-0.129	-0.287	0.254
		洞	-0.034	-1.378	-0.062	-0.978	-1.335	1.665	-0.299	-0.584	-0.347	0.857
	基部	右陰影	0.957	-3.136	-4.752	9.502	3.384	-0.268	4.712	-1.283	-0.104	0.100
紙下線立		0.445	0.055	0.732	-0.208	0.140	0.218	0.960	0.785	0.228	0.337	
右ふくらみ		0.180	-1.306	0.007	-0.553	-0.431	-1.238	-0.250	-1.259	-1.052	0.767	
左ふくらみ		1.152	0.565	3.933	1.389	1.402	-0.132	-1.489	1.365	-0.266	0.487	
広い基部		0.098	-0.126	-0.390	0.247	0.154	0.672	0.709	0.096	0.497	-0.519	
ふくらみ		-0.095	0.698	-0.360	0.429	-0.607	1.119	-1.142	0.435	-0.715	-0.971	
ふくらみ・平行	平行	-0.473	0.785	0.143	-0.520	0.245	-2.053	0.323	-0.683	-0.371	1.896	
	開放	0.421	2.704	0.071	0.763	0.073	-0.480	-0.467	0.309	0.112	0.810	
	直角	0.962	-0.111	0.476	0.044	-0.853	0.302	1.342	-0.875	-0.007	-0.479	
	二股	1.048	-1.509	2.424	0.266	-0.445	0.270	0.412	-0.444	0.037	-0.208	
	上向	0.797	0.764	-1.409	-1.020	0.249	0.634	2.753	1.919	-0.467	-1.827	
	下向	0.682	-1.189	1.573	0.437	-0.357	0.103	0.224	0.321	-0.068	-0.873	
III 枝	伸び方	交差	0.410	-0.621	-0.178	0.241	-0.311	0.595	-0.856	-0.490	0.232	0.008
		さまよい	-0.547	-0.561	-0.247	-0.532	-1.110	0.953	-0.272	-0.333	-0.596	1.659
		放射状	0.269	-0.545	-0.644	-0.411	-0.766	-1.022	0.501	0.541	0.380	1.147
	先端処理	開放	0.214	0.306	-0.166	-0.272	-0.391	0.116	-0.871	0.523	-0.992	-0.328
		直角	0.777	-0.752	-1.133	1.102	0.180	0.019	1.774	-0.153	-0.661	0.353
		先鋭	0.405	-0.385	0.277	-0.423	0.153	0.103	0.318	-1.087	0.353	0.386
	その他	冠下枝	0.417	0.359	-0.374	0.207	-0.067	-0.382	1.182	0.031	-0.250	0.261
		一線枝	-0.298	-2.112	1.111	-1.638	-2.705	-2.764	0.551	-2.488	0.801	0.208
		前に突き出た枝	0.931	-0.028	-1.293	-2.379	2.833	1.564	0.399	-0.240	0.957	-2.245
		雲球型	-0.512	0.681	0.307	-0.154	0.522	-0.433	0.582	0.039	-0.378	-0.059
		枝先雲球型	0.635	0.876	-0.804	-0.639	0.624	-0.174	-0.115	0.797	0.834	1.733
		アーケード型	-5.933	-0.495	0.849	1.121	0.658	-1.119	-1.144	0.516	3.532	-2.002
V 実・葉	押しつぶされ	-1.296	0.230	0.085	-0.433	-0.129	-0.217	1.501	0.060	-0.474	-0.979	
	垂れ下がり	-5.821	0.634	1.763	0.334	2.852	-1.637	0.511	-2.535	-3.397	-1.813	
VI 先端処理	多い	0.396	-0.413	-0.016	-0.242	0.152	0.192	-0.463	-0.416	-0.015	0.250	
	少ない	1.267	9.006	0.520	4.254	-4.639	3.202	-2.522	-4.487	1.832	-1.407	
	同じパターン繰り返し	2.848	-2.422	12.131	2.928	1.405	1.071	0.333	6.688	-0.329	-1.401	
VII 地平	落果・落葉	0.090	0.681	-0.801	-0.290	-2.017	-1.235	-0.432	-0.571	-0.761	-0.542	
	その他	-2.015	-0.025	-0.381	-0.127	-1.052	0.971	-0.218	2.172	3.336	1.155	
VIII 位置・形	葉で覆い隠す	0.055	-0.510	-0.009	-0.811	0.030	-0.849	-0.604	0.549	-0.111	-0.795	
	開放	0.513	-0.818	-1.320	0.039	0.276	0.182	-3.845	1.575	-2.095	-1.387	
	閉鎖	-0.821	-1.026	-0.915	-0.401	-1.539	-2.180	-1.173	0.490	2.220	1.011	
IX その他	根強調	0.165	-1.214	-1.701	-0.208	-1.622	-1.150	-2.915	0.847	-1.302	0.157	
	後方	-5.866	-0.443	0.779	0.262	-0.321	5.079	0.857	0.280	-1.481	1.504	
	横延長	-4.283	-1.050	-0.187	-0.268	-2.992	9.316	0.382	2.002	0.333	4.967	
	傾斜	0.806	-2.501	-2.883	6.810	2.195	0.301	1.369	-1.213	0.244	-0.134	
	陰影	0.571	-0.272	-1.784	-1.170	0.518	0.247	-1.096	1.810	-1.232	-1.729	
	草むら	0.338	-1.883	-1.572	3.467	0.861	-0.320	-0.275	-0.168	0.709	0.326	
その他	筆圧弱	-0.036	1.256	0.383	-0.589	2.403	-0.843	-1.218	-0.052	0.099	0.765	

なお数量化Ⅲ類の結果では10軸まで抽出し、解釈のしやすさのため正負のうち一方の、カテゴリースコアが2以上の変数を取りあげて解釈した。累積寄与率は48.66%であった。

第1軸は、樹冠のアーケード、地平の後方、樹冠の垂れ下がりが負のカテゴリースコアに対応している。つまりカテゴリースコアが低いほど人当たりが良く、現実から遊離し、気が弱い。

第2軸は、実・葉が少ない、幹の輪郭が強い線、左上にカテゴリースコアが高い、つまりカテゴリースコアが高いほど内向的で、防衛的で、活発でない。

第3軸は、同じパターンで、左ふくらみ、にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど、判断の独自性がなく、固着がある。

第4軸は、地平の傾斜と実・葉が少ない、草むら、にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど不安定で、気力が弱く、不安定である。

第5軸は、左傾向、実・葉が少ない、不連続、右陰影にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど内向的で、気力が弱く、感じやすく、外部との軋轢がある。

第6軸は、横延長があり、地平の後方があり、左傾向にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど、不安定で内向的である。

第7軸は、右陰影、右傾斜、枝が上向きにカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど、外部との軋轢があり外向的で意気軒昂である。

第8軸は、同じパターン、多種多様な実、にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど目先のことしか見えず成功願望が強い。

第9軸は、左傾向、右不規則、樹冠がアーケード、にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど、対外的適応困難で、内向的である。

第10軸は、横延長で冠強調にカテゴリースコアが高い。つまりカテゴリースコアが高いほど、不安定で自己拡大がある。

2. 各行動評定の特記有無に関わるバウムの特徴の判別分析

各行動評定において、基準変数を各行動評定が有るか無いか、説明変数をバウムの特徴とした判別分析を実施した。以下に有意差の見られた行動評定について結果を示した (Table 4)。

なお、特記有りの重心がすべて負であったので、判別係数もそれに沿って解釈した。

Table 4 有意差の見られたバウム特徴における各軸の標準化された判別係数と重心係数

軸名	基本的生活習慣	責任感	創意工夫	公平・公正
軸1	0.359	0.518 †	-0.416	-0.286
軸2	0.019	0.285	0.748 *	0.001
軸3	0.301	0.106	0.086	0.595
軸4	0.241	0.431 †	-0.339	0.340
軸5	-0.298	-0.272	-0.286	0.002
軸6	0.455 †	-0.511 †	-0.371	-0.174
軸7	0.767 *	0.696 *	0.111	0.266
軸8	0.114	-0.036	0.249	-0.601 *
軸9	-0.253	-0.163	-0.039	0.622 *
軸10	-0.158	-0.234	0.473	0.531 †

有無	重心	重心	重心	重心
無	0.418	0.552	0.369	0.336
有	-1.019	-0.966	-1.081	-1.714

*p<.05 †p<.10

①基本的生活

結果

重心との関係で言えば、軸7が低いほど、基本的生活が有意 ($p<.05$) に特記される。つまり、右陰影（環境との軋轢）、右傾斜（社会・他者に関心をもつ、活動への意欲）がないほど、基本的生活が特記される。

また軸6が低いほど、基本的生活が特記される傾向 ($p<.10$) がある。つまり横延長（自意識の欠如、物事を客観的に把握できない）、後方（現実からの逃避）がないほど、基本的生活が特記される傾向にある。

解釈

基本的生活習慣ができていれば、右陰影が現れない。つまり基本的生活習慣ができていれば、周囲の者とうまく接することができ、他者と軋轢も起こすことがないとまず解釈される。さらに基本的生活習慣を作るには、自意識が欠如しておらず、現実から逃避していないことが必要であろう。ここでは基本的生活習慣ができるには、自意識や現実意識がまずしっかりしていることが前提となり、その結果周囲との軋轢もなくなると解釈した方が自然である。

②責任感

結果

重心との関係で言えば、軸7が低いほど責任感が有意 ($p<.05$) に特記される。つまり右陰影（環境との軋轢）や右傾斜（社会・他者に関心をもつ、活動への意欲）がない子どもほど責任感が特記される。この結果においては、要約すれば右の描写がないほど、責任感が強いことになる。

軸1が低いほど、責任感が特記される傾向 ($p<.10$) がある。つまり樹冠アーケード（人当たりがよい）、地平の後方（現実から遊離）、樹冠の垂れ下がり（気が弱い）があるほど責任感がある傾向にある。

軸4が低いほど、責任感が特記される傾向 ($p<.10$) がある。つまり、右陰影（環境との軋轢）、傾斜（不安定、生活基盤の不安定、足場を失う不安、適応しようとししない）がなく、実、葉が少なく（気力が弱い、将来への希望がない）なく、草むら（隠蔽、不安定）がないほど、責任感が特記される傾向がある。

軸6が高いほど、責任感が特記される傾向 ($p<.10$) がある。つまり、横延長（自意識の欠如、物事を客観的に把握できない）や後方（現実からの逃避）があるほど責任感が特記される傾向にある。

解釈

右陰影がないこと、さらに右傾斜がないこと、つまり環境との軋轢がなく、社会や他者への関心が低い方が責任感が高いという結果に加え、実・葉が多いこと、つまり気力があり希望があること、さらに草むらがなく、つまり隠蔽することもなく不安定でもないことが責任感が高いことについては、要するに他者と衝突することもなく、気力希望があり、心も安定していることが責任感につながるといえる。一方で、傾向であるものの横延長という自意識の欠如や、後方という現実への逃避あることを考慮すると、この場合の責任感は、年齢からすれば自意識を持たないことによって教師から言われたことを忠実に守ることとも考えられる。さらに

小学校4、5年生という段階を考えると、この時期の責任感是他者から押しつけられた他律的な責任感とも考えられ、それゆえに自分自身で判断されたものではない可能性もある。子どもの場合であれば、適当に外界に興味関心があったり、多少は外界との軋轢もあった方が自然な感じもするので、この責任感についてはさらなる検討を加える必要がある。同じく傾向だが、樹冠のアーケードや垂れ下がりがあると責任感があることは、積極的な責任感というより人の言いつけを守るといった消極的な責任感が予想される。

③創意工夫

結果

重心との関係で言えば、軸2が低いほど、創意工夫が有意 ($p < .05$) に特記される。つまり実、花、葉が少なく（気力が弱い、収穫希望が弱い）なく、強い線（現実との隔離）がなく、左上（生に対し傍観的、自閉的）がないほど、創意工夫が特記される。

解釈

実、花、葉が多いことは自分をよく見せようとする自己顕示的な印象があり、また内部と外部を隔離する壁がないこと、つまり防衛が少ない方が当然のごとく創意工夫は高くなる。また創造的であるなら外部に出ていこうとするから、傍観しているような消極的な態度はとらないだろう。この創意工夫については、バウムの結果と、教師の評定が唯一双方ともにポジティブであり、スムーズに解釈ができた。

④公正・公平

結果

重心との関係で言えば、軸8が高いほど公正・公平が有意 ($p < .05$) に特記される。つまり同じパターン（目先のことしか考えない、判断の独自性がない、視野が限られている）、多種多様な実（おどけ、こどもじみた、未熟、よくばり）が高いほど、公正・公平が特記される。

さらに軸9が低いほど、公正・公平が有意 ($p < .05$) に特記される。つまり、左傾斜（内向性、未来・外界世界からの逃避、防衛的、感情の抑圧、過去への執着）がなく、右不規則（他人との関係や環境との軋轢、対外的適応困難）がなく、樹幹のアーケード（行儀がよく、人当たりがよい）もないほど、公正・公平が特記される。

また軸10が低いほど、公平公正が特記される傾向 ($p < .10$) にある。つまり、横延長（自意識の欠如、物事を客観的に把握できにくい）がなく、冠強調（自己拡大、自己賛美、防衛もある、劣等感の補償）もないほど、公平公正が特記される傾向にある。

解釈

公正・公平は、枝葉の書き方が同じパターンをとることと関連する。つまり目先のことしか考えられなかったり、独自の判断ができなかったりすると公正・公平があると解釈される。一方で同じパターンの独自判断のなさは他律的とも考えられ、従ってこの時期の子どもに対して教師が評定する公正・公平性とは、自分で正誤を判断できなくとも、どちらかといえば大人の決めた規則に従うような従順性を含めた公正・公平なのかもしれない。このように教師の取り決めを守ろうとする子が、教師には公正・公平な子に見える可能性がある。またこのように、同じパターンという特徴を自分自身の判断がないとネガティブにとらえる一方で、校則に素直

に従う従順さというポジティブにとらえてみると、学校の規則にうまく乗れる子であるとも解釈できる。

また左傾斜がなく右不規則がなくアーケード（行儀よさ）もないことは、内にこもることもなく、しかも対外的に軋轢もないということであり、さらに中立した立場を取られることを示し、それが公正・公平ということも考えられる。

⑤その他の結果

なお、明朗快活、自主根気、思いやり、協力性、自然愛護、勤労奉仕、公共心における教師の評定と、バウムテストの間には関連が見られなかった。

考察

まず解釈上、スムーズにいった点について触れてみる。

基本的生活習慣の結果については、右陰影ないことが特徴的であったが、その前に傾向ではあるものの、横延長がないこと、つまり自意識が保たれていることが端緒となって、それが基本的生活習慣を生み、その結果他者との軋轢が生じないと解釈するが自然であろう。また、創意工夫については、実や花や葉が多いこと、つまり気力と収穫希望に満ちていることが創意工夫と関連していた。つまりバウムに表れた気力と希望が、教師の創意工夫評定と関連していた。これらはバウムと行動評定が一致しており、自然に解釈できた。

一方で、両者に違いが見られ解釈が困難であった点を指摘したい。つまり責任感がある子にバウムからすれば横延長が見られ客観的な判断ができないとされたり、公正・公平のある子どもに同じパターンの葉が見られ独自の判断ができないとされたりした点についてである。まず、責任感や公正・公平は道徳心をさすものであるが、本結果だけからすれば、このような特徴を示す子が、どちらかといえばネガティブなバウム特徴を示したことになる。しかし、この時期、つまり小学校4、5年の道徳意識について言えば、まだ他律的な道徳観が残っていることを考慮しなければならず、その点から言えば先生に従順な児童像が想像されよう。中里（1985）によればカンニングは14歳くらいの自意識が育った頃に生まれるとされており、逆に自律的になるからこそ起こる行動であるという。つまり小学校の4、5年という時期の道徳観もバウムテストとの結果からすれば一考を要する。このバウムの結果についてネガティブな見方をするなら、教師の申し渡しをそのまま受け取る児童が、責任感があるとか、公正・公平であるとか評定され、教師の評定が、子ども自らの判断や表現を押さえているかもしれない。そう考えると、道徳心を押しつけることは、子どもの自由な発想や独自の判断を抑えることにもつながろう。

逆に、公正・公平における「同じパターンの繰り返し」から導かれる「独自の判断ができない」や「視野が限られていること」を教師に従順であるにとらえると、「校則をよく守る」ことになり、そのような子は学校に親しみやすく、学校生活の軌道にも乗りやすいと考えられる。

研究2

研究1のようなバウムテストの結果から、児童のバウムテストからは10軸のバウムの特性が得られた。そして、そして教師の行動評定を基準変数として児童のバウムテストの特性を説明変数とする判別分析から、児童の行動評定とバウムの特性との関係が明らかになった。次に研究1で得られた結果に基づいて児童をいくつかの意味ある群に分け、それらの群ごとに児童の行動評定を教師にフィードバックして、各群についての教師の印象を記述してもらうことにし

た。これはバウムテストに関する結果が行動評定と関係するかどうかを教師に振り返ってもらい、バウムテストの結果をその妥当性について行動評定から検討するという2つの目的が含まれる。得られた教師の印象から、両者の食い違いを考察してみたい。

材料 研究1で実施したバウムテストの結果データ

対象者 バウムテストを実施したクラスの担任教師（4年生と5年生担任）

手続き 研究1で実施したバウムテストの結果データをクラスター分析にかけ、意味ある群に分けて、それを教師にフィードバックして印象を求める。なお教師へのフィードバックには教師自身が評定した行動評定11項目の結果も含まれている。

結果

1. クラスター分析の結果

児童をサンプルとした研究1での数量化Ⅲ類で得られた軸を変数としたサンプルスコアを用いて、Ward法によるクラスター分析を行った。その結果、5つの意味あるクラスターが得られた。なお、2名以下の構成の7つのクラスター（計8名）は今回は省いて報告することにした。各クラスターに該当した人数は、クラスター1が10名、2が7名、3が7名、4が4名、5が19名である。

2. 各軸ごとのクラスター間の一要因の分散分析

クラスター分析による5つのクラスターについて、それぞれの10軸のサンプルスコアを示したのが、Figure 1である。各軸ごとに5クラスター間の一要因の分散分析を実施した。その結果有意差の出た軸だけ示すことにする。

①軸2

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=16.120, p<.01$) が見られ、Duncan法による多重比較の結果、クラスター5は2, 3, 4より低く、また1は他のすべてのクラスターより有意に高かった。

②軸3

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=3.775, p,.05$) が見られ、Duncan法による多重比較の結果、クラスター3は、4, 1, 5よりも有意に低かった。

③軸5

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=8.952, p<.01$) が見られ、Duncan法による多重比較の結果、クラスター4は他のすべてのクラスターよりも低く、1は4, 5, 2よりも有意に高かった。

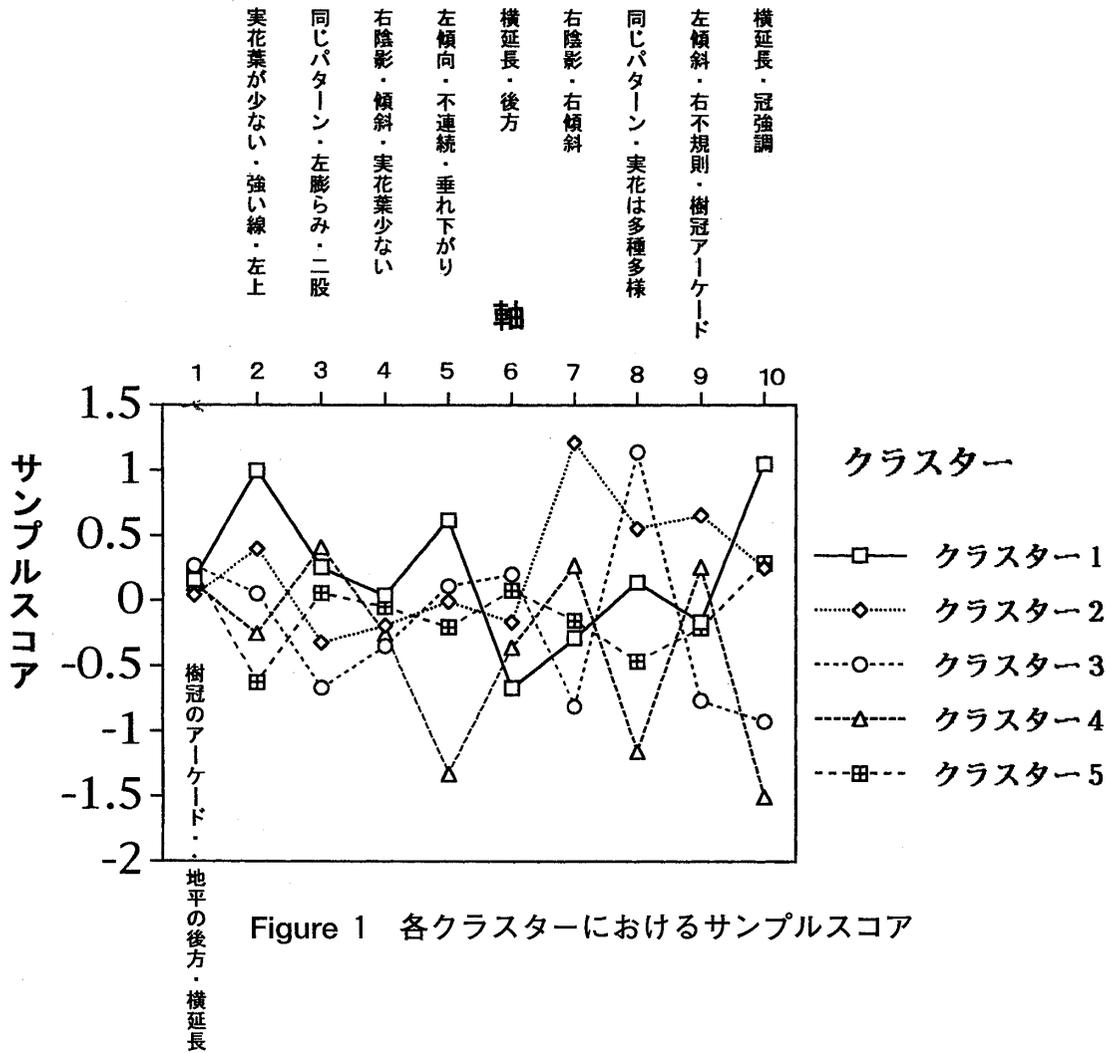
④軸6

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=2.790, p<.05$) が見られ、Duncan法による多重比較の結果、クラスター1は3, 5よりも有意に低かった。

⑤軸7

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=5.104, p<.01$) が見られ、Duncan法による多重比較の結果、クラスター2は、3, 1, 5よりも有意に高かった。

⑥軸8



クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=14.150, p<.01$) が見られ、Duncan 法による多重比較の結果、クラスター4は、他のすべてのクラスターより低く、またクラスター3は4, 5, 1よりも有意に高かった。

⑦軸9

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=5.460, p<.01$) が見られ、Duncan 法による多重比較の結果、クラスター3は5, 4, 2よりも有意に低く、またクラスター2は3, 5, 1よりも有意に高かった。

⑧軸10

クラスター間に有意な差 ($F_{(4,42)}=15.204, p<.01$) が見られ、Duncan 法による多重比較の結果、クラスター4は1, 5, 2よりも有意に低く、1はほかのすべてのクラスターよりも有意に高かった。

以上のような結果から、クラスター1, 2のように比較的ネガティブな特徴が顕著に見られるクラスターと、クラスター3, 4, 5のようにネガティブな特徴が見られないクラスターに分けられる。

3. バウムテスト結果におけるクラスターと教師の印象の関連

1. クラスター 1

バウムの特徴をまとめると、実、花、葉が少なく、強い線、左上であることから、気力が弱く、自意識が欠如していると考えられる。

教師の行動評定では、協力性があると評定された児童が多いクラスターであり、印象では「トラブルも少ないが、その反面、友達のいいなりになったり、集団内での自己主張が苦手なタイプである。また一人での行動より集団（グループ）での行動を指向する傾向もある。学業成績は中程度の子供が多い。」とされている。両者を比較すると、気力が乏しく自意識が欠如して、それでいて創意工夫がなければ、友人のいいなりになることは十分に考えられる。

2. クラスター 2

バウムの特徴をまとめると、右陰影と右傾斜が見られることから、社会・他者に関心をもち、活動への意欲があるものの周囲との軋轢があること、さらに左傾斜、右不規則があることから、他人との関係に関心があり、環境との軋轢があり、対外的適応困難があり、内向性、未来・外界世界からの逃避、防衛的、感情の抑圧にいたることが考えられる。

教師の印象では「活潑で自己主張のはっきりしている子供が多く、そのため友達と衝突するすることも多い」とあり、衝突という面では一致している。

3. クラスター 3

バウムの特徴からすれば、同じパターン、多種多様な実というみんなに合わせたおどけるイメージがあり、逆に同じパターンと左膨らみと二股、さらに右陰影、右傾斜もないことから、目先のことでみんなに合わせてわいわいおどけたり、また固着もせず引っ込んでいるわけではない。

教師の印象では、「学校生活にうまく適応している子供であり、また責任感がある子供が多いと言うことで、好感の持てる子供たち」という報告である。バウムの特徴と適応の具体的な様子については対応を見つけることが難しい。

4. クラスター 4

左傾斜、不連続、垂れ下がり、同じパターン、実・花・葉多種多様、横延長、冠強調のすべてでないことから、軋轢もおどけも、さらに不安定さもなく、比較的落ち着いており、むしろおとなしい姿が連想される。

教師の印象としては、「人なつっこい子供が多く、特に教師にかまってもらいたいタイプであり、それだけに家庭に不満をもっていたり、不全感を感じたりする可能性があり、4年生が多い」とされている。バウムでは落ち着いたおとなしいタイプと予想されるが、教師の印象ではより人間関係における詳細に記述が得られている。バウムの結果をそのまま教師の印象と対応できず特に人なつっこくかまってもらいたい点はバウムからは予想できない。

5. クラスター 5

実、花、葉が少なく、強い線、左上といった特徴が見られず、他は特徴のない群である。平均群であるとも言って良い。

教師の印象では、「明朗で活発な子供が多いようで、創意工夫、協調性、勤労奉仕にも印

が多く、比較的安定した群」という。このように適応している場合にはバウムには特徴が出ない可能性が考えられる。

全体考察

1. 研究1の結果を基にした「子どもの成長と社会化」について

まず子どもの適応において葛藤がないと思われる行動評定は創意工夫であろう。創意工夫が評定される子どもに実や葉が多いことは、生きる意欲が大きいことであり、それが原動力となって工夫を生んでいるとも言える。そのままバウムと教師評定の双方ともにポジティブな特徴であった。

また子どもの成長と社会化との葛藤がうまく緩衝されている例は、基本的な生活習慣である。まず右陰影がないことが基本的な生活習慣と関連していたが、そのまま解釈すると基本的な生活習慣が形成されると周囲と衝突がないとされよう。しかしここで横延長もないという結果、つまり自己意識があることを同時に考慮すると、自己意識があれば自分を制御でき、基本的な生活習慣の形成と周囲との軋轢を防ぐことを同時に可能にすると考えられる。つまり自己意識が基本的な生活習慣の獲得のような社会化をスムーズに進めていると考えられる。このようにバウムの特徴を順序よく解釈していけば、子どもの適応の姿が見えてこよう。

次に子どもの成長と社会化との関係で注意を要する行動評定はまず責任感である。責任感は右陰影がないことに関連し、一方で傾向であるものの横延長や後方があるほど、責任感の特記があるという結果である。これは教師の評定ではポジティブである一方で、バウムの解釈の方は注意を要する。つまり「右陰影がない、あるいは右傾斜がない」責任感とは、周囲との軋轢を避けるように差し障りのない関係を保つことと言える。しかし一方で Koch (1970) が、右陰影は接触能力、適応への意欲の指標とも記していることを考慮すると、つまりうがった見方をすれば、右陰影がないことは外への関心のような子どもらしいはつらつきがないとも言える。ここで右陰影がないことをそのまま良しとする解釈は避けたい。つまりこの発達時期では道徳的判断における他律性が残っているとも考えられ、自分の判断基準を持たず教師に対して従順な姿が責任感として映るとも考えられるからである。いわば自意識が欠如したり客観的に判断できないゆえの見かけの責任感と解釈することもできる。このような発達的な観点からも考察していくのも大切であろう。

また公正・公平の結果は、同じバウムの特徴でも、適応について二つの相反する解釈が可能であった。つまり同じパターンを取ることと公正・公平が関連していることは、つまり独自の判断ができないことや視野が限られているというネガティブに解釈できる一方で、このような視野の狭さが「校則をよく守る」従順さとなり、それは学校に親しみやすく、学校の軌道への乗りやすさを表す指標ともいえる。このあたりはこの時期の発達的な特徴を押さえておくと同時に、個々の子どもを縦断的に見ていく必要があることがわかっていく。本研究では、分析上あえて一面の解釈がなされている所見(杉浦, 1991)を用いたが、実際の心理テストではクライエントを見ながら多面的に解釈すべきであろう。

2. 研究2の結果を基にしたバウムの特徴と教師の印象

研究2の結果では、バウムの結果と教師の印象記述と比較的一致していたのはクラスター1と2であった。クラスター1では、実、花、葉が少なく、強い線が見られたり、左上が見られ、それに属する子どもは気力が弱く自意識が欠如していると考えられるが、教師の評定でも人の

いいなりになったりする点で一致していた。またクラスター2の右陰影と右傾斜は、教師の評定でも友達との衝突として現れている。このような教師の目に映りやすいような非社会的および反社会的のネガティブな特徴はバウムに現れやすいと言える。

またクラスター3, 4, 5のように、ポジティブなバウムの特徴と言うより、ネガティブとされる特徴を表さないというクラスターの子どもでは、教師から学校で比較的適応しているような印象を得ていた。これはクラスター1, 2のような学校不適応の子どもがその訴えとしてバウムテストにその兆候を現すことと比較すると興味深い。クラスター3, 4, 5のうち3の教師の評定は「適応している、好感が持てる」という一般的な印象であった。一方で、4, 5ではバウムの特徴としてはネガティブな特徴が出ないか低いのであるが、それがそのまま適応というわけではなく、却って教師の方にバウムには現れないような、たとえば「人なつつこいとか、かまってもらいたい」とかの具体的な姿が提示された。バウムの結果によって教師に新たな子どもへの気づきが、それもバウムからは予想されないような気づきが得られており、バウムの結果を教師が受け取ることによって教師に新たな気づきが生まれることが期待される。

展望

本研究は、子どもの心の成長と社会化との葛藤という点から考察してきたが、社会化を多様にとらえてみるのも必要だろう。教員の言うことに従うことも、あるいは学校の規則に従うことも社会化の一つであろうが、それをあえて発達的な観点から自律にいたる前の他律の段階としてややネガティブなとらえ方をしてみた。しかしこれについても縦断的に検討していく必要がある。また教師の印象との関連で言えば、子どもがバウムによって表現してくることに教師が気づけなかったりすることもあるし、一方で教師に新たな気づきをもたらすこともある。また今後は教師の印象を自由記述ではなく、項目によって取るなどの精巧な方法で確認していく必要がある。

また今回の実施方法として、特に研究2では評定まで教師に提示してしまい、教師がそれを加味しながらクラスターの特徴を報告することになってしまった点が問題として残った。評定を見せずに独立してクラスターの特徴を記述してみれば、バウムの結果と教師の印象の違いが鮮明になり、新たな問題点が示されたと思われる。これは今後の検討課題であろう。

<ABSTRACTS>

The relationship between the behavioral assessments of children by teachers and the features of the Baumtest (tree-test); Seeking an appropriate judgement of the children in school.

The purpose of this study is to clarify the relationships between the behavioral assessments of children by teachers and the features in Baumtest, and to construct a desirable adjustment of children in school.

24 fourth- grade children and 30 fifth- grade children were participants in this study. The results showed that in creativity the children who received positive assessments from teachers showed the same positive features in Baumtest. However, as far as responsibility and fairness were concerned, the children who received positive assessments from teacher showed the negative features in the Baumtest.

It is considered that we should examine both the features of the Baumtest and the behavioral assessments by teacher when we judge the adjustment level of children in school.

<引用文献>

- 荒木ひさ子 1998 バウムテスト 岡堂哲雄 (編) 現代のエスプリ別冊 <臨床心理学シリーズⅡ> 心理査定プラクティス 至文堂
- 林勝造・一谷 彊 1973 バウムテストの臨床的研究 日本文化科学社
- コッホ, C. 1970 林勝造・国吉政一・一谷 彊 (訳) バウム・テスト ―樹木画による人格診断法― 日本文化科学者
(Koch, C. 1952 The tree test ; The tree -drawing test as an aid in psychodiagnosis.)
- 中里至正 1985 道徳的行動の心理学 ―自己抑制と愛他行動の形成― 有斐閣
- 杉浦守邦 1991 ヘルスカウンセリングの進め方3 心理テストの進め方・読み方 東山書房
- 津田浩一 1992 日本のバウムテスト ―幼児・児童期を中心に― 日本文化科学社